

恐るべし、小さな町の本気の映画

——「小さな町の PR 映画だからチャラっと適当に撮っとけばいいと思ってたわけ？」

——「…そんなことねえよ！」

上の台詞は、PR 映画の撮影に挫折しかけている主人公に、幼馴染が活を入れたときのものである。このやり取りにも表れているように、『鷺宮☆物語』は小さな町の PR 映画にもかかわらず、並々ならぬ熱意で撮られている。

主人公隆は、鷺宮町出身で現在東京に住む大学生。高校の先輩の頼みで、地元の PR 映画を撮ることになり、故郷に呼び戻された。久しぶりに鷺宮町に帰った隆は、すっかりアニメの聖地として有名になった町の様子に困惑する。一度は「もう俺の知っている鷺宮じゃない」と投げやりになるが、鷺宮を訪れるオタクたちのたのしそうな姿とそれを受け入れる住民たちの姿を見て、ついに一本の映画を完成させる。

さて、この映画はいったい誰に向けた映画なのであろうか。『らき☆すた』ファンのためのものであるのか、鷺宮町（現・久喜市）民のためのものであるのか、AKB48 の増田有華ファンのためのものであるのか。私は、そのどれにも当てはまらない人にこそ、偏見を持たずに見てほしいと思う。なぜなら、この映画は鷺宮町を知るだけでなく、自分の町を見直す素敵なききっかけになるからだ。

実は、意外にも『らき☆すた』に関する描写は少ない。だからと言って地域の名所を延々と紹介するわけでもない。この映画は、鷺宮町を撮っているというよりも、鷺宮町にいる人々を撮っている。主要メンバーの一人は素人だし、本物の町長も出てくるし、商工会の面々も頑張って台詞を喋っている。商店のおじさんおばさん達の素朴な姿も映っているし、鷺宮町を訪れるファンも出演している。彼らの様子を見てみると、なんて温かい地域なのだと思えば同時に、自分が住むまちには一体どんな人がいるのだろうかと思いたくなる。地域の人々にスポットを当てているからこそ誰でもすんなりと見ることができるし、この映画に自分の町を投影することができる。

小さな町が『らき☆すた』人気に胡坐をかかずに本気で取り組んだ結果、どんな人でも楽しめる映画となった。

平侑子（大学院博士課程1年）